

「G-CLASS 2026」出場選手に訊く ① 田村ハヤト



物事を形にするのは自分の中で ポジティブな発想ができるかどうか

5月13日より開幕するGLEATのシングルトーナメント「G-CLASS 2026」。昨年続く第2回は、厳選された8名のエントリー選手によって争われる。そこで出場全選手に意気込みを訊くインタビューを順次お届けする。第1回は、4月29日に地元・群馬での凱旋興行も控える田村ハヤトが登場。長期欠場から復帰し、5ヵ月が経過した現在の心中を語った。(聞き手・鈴木健.txt)



Tさんと組んでいるとリングの中より コーナーで控えている時の方が疲れる

——ハヤト選手は昨年の「G-CLASS」開催時は欠場中でしたので、今回が初エントリーとなります。

田村 シングルのトーナメントとしては、2022年のG-REX初代王者決定トーナメントには出ていて、準優勝だったんですよね(エル・リングマンに敗れる)。だから、その先を目指すという意味でもトーナメントといったら僕じゃないですか。トーナメント大好き、一発勝負に強い男なんで。

——甲子園でそれを証明しているなので、説得力があります。

田村 そういう意味では、トーナメント歴の長い人間なんですよ。もちろんタイトルマッチとは違うものですけど、ちっちゃい頃から何事にも一番になりたい性格ですから優勝することが自分の目的意識を満たしますし、おそらくこれで優勝すれば7月1日(5周年記念大会)に挑戦ですよね？

——正式には決まっていないですが、時期的にはそうなるでしょうね。

田村 だから僕の中では優勝したあとのプランも描けていますし、何よりも1回戦がTさん(T-Hawk)っていうのがね。過去のシングルマッチはユニットも違ってずっとやり合う関係にあったのが、今回はまったく違うシチュエーショ



んじゃないですか。

——タッグパートナー同士の一騎打ちとなります。

田村 でもやりづらさはまったくくないです。組んでいても、1対1で闘うとなれば最大限のリスペクトを持ちつつ、全力で叩き潰し合えると思っているので。

——過去3度シングルで対戦し、戦績はT-Hawk選手の2勝1敗ですが、一番近い一騎打ち(2023年12月30日、TDCホール)ではハヤト選手が勝ってG-REX王座を奪取しています。

田村 組んでみて見えたのが、溢れるエネルギーですよ。僕がG-REXのチャンピオンになった時に欠けていたものを、今のTさんが体全体から放っている。それを僕が一番の至近距離から浴びている感じです。本来の僕は、同じようにエネルギー溢れる人間なんですけど、ベルトを持っていた時はチャンピオンとしてどうあるべきかということすごく悩んでいて、本来の自分が出せなかった気がするんです。でも、復帰してTさんと組むようになってから、本来の自分を取り戻せた。

——T-Hawk選手のノリに乗せられている？

田村 引き出されていますね。それによって逆にTさんからも引き出せていると思うし。僕は子どもの頃から、野球をやっていて声を出すのが習慣になっているんです。出さないと怒られていましたから。だから今のノリが懐かしい感覚ですよ。

——よく二人であれほど大きな声をずっと出し合っているなと感心します。

田村 あれ、めちゃくちゃ疲れるんですよ。これもTさんと組み始めて気づいたことなんですけど、リングの中で闘っている間よりもコーナーで控えている時の方が疲れるんです。

——本来、スタミナを回復させるはずのコーナーなのにむしろ消耗していると。

田村 いやあ、参りました。でも、必要以上に声を出すことによってお客さんにも元気が伝わるじゃないですか。この声で、少しでもお客さんが元気になっ

てくれればと思うと、苦にならないんですよ。

——それはとてもいいことだと思いますが、声がデカすぎて聞き取れないと元も子もないです。

田村 そうなんですよね。自分ら同士も実は半分ぐらい聞き取れていないですから。

——聞こえていないのに会話が進んでいるんですか。

田村 もう、半分ノリでいっていますよ。お互いの声が被る時もしょっちゅうだし。でも、なんとなく言わんとしていることは理解できるので。

——よく会話が成り立っているなと感心するレベルです。

田村 僕も不思議なんですよね。会話に限らずここまで組んで噛み合うとは正直、思っていなかったの。本当にたまたま一回組んでみたら、観客や周りの反応がけっこうよかったんです。それで、じゃあこのままいこうかという感じで続いた。

——長期欠場明けの昨年12・4新宿FACEで初めて組んで、次の大会ではもう空位だったG-INFINITY王座決定トーナメントにエントリーされていました。

田村 そう、だから組み始めてまだそんなにやっていないんですよ。それが年明けにG-INFINITYへ挑戦したじゃないですか(1・20新宿)。あれも獲れなかったけど試合をやっていて今まで体験していないほどじっくりと来たんです。やっぱり、うまくいくと楽しくなるものなんですよ。

——ノリとしてはベタなほどに野球経験者というカラーを前面に出していますね。

田村 いやあ、当時(高校時代)の先輩を思い出します。ああいうTさんみたいな先輩が実際にいたんですよ。だから誤爆して張られるたびにその先輩の顔が浮かんでくる。

——ちなみにその方は今どこで何を？

田村 わかりません。野球はもう、やっていないんじゃないですかね。

——では、その先輩の代わりにT-Hawk選手とタッグを組んでいるような感覚？

田村 まあ、野球にタッグはないけど懐かしい気はします。

——入場時のポーズで、ハヤト選手がキャッチングスタイルでT-Hawk選手がバッターボックスに立つじゃないですか。あれ、なんで逆にしないんですか。高校時代にキャッチャーだったのはT-Hawk選手の方ですよ。

田村 そうなんですよ！ Tさんがキャッチャーなのに。なんでなのか僕も聞いたら「ヒザが痛いから座って」って言われました。俺も腰いてえんだけどなと思いつつ、座っていますけど。僕はレフトでしたけど守備よりもバッティングの方で目立っていましたから、それだったらバッターの構えの方が向いていると思うんですけど。

——やったことがないキャッチャーの構えを。

田村 見様見真似で。でも、絵ヅラ的には僕がやった方がじっくりくるのも確かなんですよ。

——体型的にはそうです。

田村 撮影会になると「お二人の決めポーズで撮りたいんです」ってよくリクエストされるんです。そのたびに僕がひたすら座って、お客さんはその後ろに回って審判のポーズを撮りたがるという。

——いいサービスですね。

田村 だから、いい形ではあるなと。正直、野球の色がここまでプロレスで出せるとは思っていなかったですから。相手をロープに振って、二人でバットのスイングをするという合体プレーもやってみたんですけど、あんなのは今までやったことがなかったですから。そういうタイミングで二人が闘うわけですから、これは相当なエネルギーが放出される試合になるでしょう。

——お客さんは耳栓を用意した方がいいかもしれません。

田村 そこもお互い遠慮はしないですから。声出しも張り合っちゃうんでしょ。その上でバッチバチにやり合う。おそらく1回戦4試合で一番お客さんも一緒にノれる試合になると思います。

——トーナメントというのを抜きにして、私の中では田村ハヤトvsT-HawkというカードはGLEATにおける一つのブランドなんです。回を重ねるごとに熱量が上がっていくという意味で。

田村 僕自身も過去の3回とはまったく違うものになるという予感がします。だから、二人の闘いの進化している部分も見せられると思っています。



今の河上さんが本来の姿だと思うけど 僕とやる時は怖い一面を見せてほしい

——そうした熱い闘い間違いなしの1回戦を勝ち進んだあとが、河上隆一がブラスナックルJUNというのも、ガラリと感覚が変わります。

田村 僕はまだ今のブラスナックルJUNとほとんどやっていないんで、シングルでやったらどうなるのかっていうのはあるんですけど、ここは河上さんとやりたいです。BULK ORCHESTRAの時はずっと組んでいたし、やり合うこともあったけどヘビー級の闘いを見せられる相手なんで、久しぶりに“シャーマン”ではない河上隆一と肌を合わせたい。

——シャーマンではなくなった河上隆一はどう映っていますか。

田村 なんか、何をやっても許される存在になりましたよね。正直、ほぼ空回りじゃないですか。だけど、それでもOKみたいなキャラクターになっている。でも僕とシングルでやる時は怖い一面を見せてほしい。今の明るいキャラクターはもちろんいいと思うんですけど、僕とやるなら誰もそれは求めていないと思うんで。その上で僕は、河上隆一の本気の本気を全部受け止めるつもりでいる。120%の河上隆一でぶつかってきてもわからないと、やる意味がないでしょう。今のノリで来るぐらいならブラスナックルJUNとやった方がまだいい。

——あの方向転換自体はどう受け取っているのでしょうか。

田村 いいんじゃないですか。ぶっちゃけ、あれが河上さんの本来の姿だと思うんで。

——無理しているのではなく、あれが素性なんですね。

田村 もちろんプロレスラーとしては怖い一面も持っていますけど、人間とし

ではあれが河上さん。それを本人が包み隠すことなく前面に出そうとしたのであれば、それで突っ走るしかないと思うんですね。

——あれが素顔だとすると、シャーマンの頃は…。

田村 シャーマンの頃は頑張っていました、うん。

——頑張っていた！

田村 本来の河上隆一じゃないなって思っていました。明るいキャラクターだけど、闘えばパワフルファイターというのが河上隆一ですから、あんな暗闇がどうこう言っているのは、頑張っているようにしか見えなかったです。

——だとしたら、やはり今の方がいいんでしょうね。

田村 でも、明るさとフザケたノリは別モノですから。そんな感じで来たら、速攻終わらせます。

——別ブロックの4人に関しては、どうでしょう。

田村 僕は石田凱土が来ると思います。これは願望込みでもあるんですけど、今のこのタイミングでやってみたい気がして。実を言うと、まだシングルマッチで一度もやっていないんですね。

——それは意外でした。



田村 だから初のシングルマッチがトーナメントの決勝戦というのもシチュエーション的にいいし、やっぱりGLEATの未来を見せるのはこのカードだって。リンダマンとは、トーナメントに優勝すればさっきも言ったように7月1日にベルトを懸けてやるようになるでしょうから、その前に石田とバチバチの闘いをやっておきたいです。

——長期欠場から復帰して5ヵ月が経ちますが、復調具合はどうでしょう。

田村 これがね、絶好調なんですよ。5ヵ月でトーナメントに優勝して5周年のメインまでいけるという感触が持てるほどになっています。約1年休んで、遅れた分を早く取り戻したかったので休んでいる間もやれることはしっかりやっていたし、復帰のタイミングもこれなら今すぐ100%出せるところまで戻ったという確信があった上だったの、復帰戦の時点でフルに動けていました。

——確かに復帰後、ブランクはまったく感じさせていないです。

田村 だから、復帰明けでTさんと組んだのもいいタイミングだったんだと思います。組むべくして、こうなったんだなって。僕の中に、GLEATって明るさが大事だっていうのがあるんです。正直、去年は明るいニュースがあまりなかったじゃないですか。休んでいる間にネットで情報を見てもネガティブなニュースしか伝わってこなかった。だから自分がリングに戻ったらとことん明るくしてやると思っていました。明るく、元気に、わかりやすく伝わりやすいプロレスを見せていきたい。Tさんと組むことで、今はそれができていると思うんですよね。

——まあ、わかりやすいですよ。

田村 僕がお客さんの立場で見ても、今のGLEATは見やすいと映っている。なので、これを継続すれば少しずつかもしれないけど確実にお客さんは増えていくと思っています。

初の凱旋興行をプロレスの入り口に。 そのためにもわかりやすい試合を

——そんな中、4月29日にはGメッセ群馬で地元凱旋興行があります。

田村 プロレスラーになって7年目にして、初めて群馬県でプロレスの試合ができます。前の団体の代表(JUST TAP OUT・TAKAみちのく)にはやろうって言われていたんですけど、やらないままやめちゃったんで。でも、自分で営業回りをやってみて想像以上に大変だと感じました。僕はお世話になった方に対しLINEとかじゃなく直接お会いしているんです。見に来てほしいと思ったら、ポスターを送りつけて貼ってもらって終わりじゃなく、まずはお願いをしにいきます。だから、けっこう回りまくっていて。でもその結果、野球部の監督やコーチ、現役の生徒たち野球部全員で来てくれるんです。

——前橋育英高校野球部が全員で応援に！

田村 やっぱり、お世話になった恩師や今の高校生にプロレスラーとしてやっている姿を見せたいので。監督さんから「みんな連れていくから」と言われた時は嬉しかったですよね。

——前橋から高崎にあるGメッセまではそれほど遠くないんですよ。

田村 むしろ近いです。自転車で15~20分ぐらいでいけます。やるとしたらGメッセでやりたかったんです。新日本プロレスさんもやっているし、会場も新しくきれいだし。Gメッセって僕が東京へ出たあとにできたんで見に行ったことはないんですけど、高崎の駅からも徒歩でいけるので便利だし、東京からも近いんですよ。

——新幹線で1時間かからないですからね。「ホームセンターセキチュー Presents」と、スポンサーもしてもらえました。

田村 地元の企業さんの理解を得られたのはありがたいとともに、地元出身者としてはステータスじゃないですか。それ以外にも群栄化学工業さんとい



う県内で有名な半導体メーカーの会社にもご協力いただいていますし、メディアの方でも群馬テレビさん、上毛新聞さん、エフエム群馬さんについてただけると。

——群馬のメディア総出じゃないですか。

田村 セキチューさんの社長さんがスポーツを応援されている方で、群馬ダイヤモンドペガサス(プロ野球独立リーグチーム)や、ザスパクサツ群馬(プロサッカーチーム)のバックアップもしているし、新日本さんのBEST OF THE SUPER Jr.をスポンサーしている企業なんです。その会社がスポンサーになってくれたんですから…。

——ある意味、そこに田村ハヤトが並んだ形になります。

田村 嬉しいですよ。だから、群馬出身の僕をきっかけにしてプロレスを好きになってもらいたい。当日は、初めて生で見る方やそこまでプロレスに詳しくない方も多いと思うので、この大会をプロレスへの入り口にしてもらいたいです。

——凱旋興行は、それが持ち味ですよ。

田村 そのためには、こういう大会こそザ・プロレスと言えるようなわかりやすいものがないと思うんですよ。まだカードは決まっていらないですけど、僕のイメージとしてはやっぱりTさんと組んでBLACK GENERATION INTERNATIONALと闘うのが一番、今のGLEATを見せられると思っています。(対戦カードはハヤト & 伊藤貴則 & 河上隆一 vs<B.G.I.>石田凱士 & 渡辺壮馬 & KAZMA SAKAMOTOに決定)

——それにしても、全国優勝を果たした地元の高校球児が、十数年経ったらプロレスラーになって帰ってきてその姿を披露するというのもいい話だなと思います。

田村 当時を知っている人は、僕の姿が変わりすぎちゃっているからビックリするでしょうね、溜めに溜めた分。今のところ、次にやるとしたらちょっと間を空けたいとは思っているんです。それほど今回、やってみて大変だったんです。でも、初めて見に来た方に「来年もまた見に来たいです」って言われたら、僕は単純なので「やろう!」ってなっちゃうと思うんです。

——流れ的にもT-Hawk選手とのタッグ結成→凱旋興行→G-CLASS→5周年興行と、途切れることなくテーマであったり打ち込めるものであったりが続くのもいい流れです。

田村 そうなんです。僕はけっこう先のヴィジョンを見据えて動くタイプなんで、こういう環境が続けばポジティブな方向に向かっていけると思うんですよ。物事を形にするのって、自分の中でポジティブな発想ができるかどうかだと思っています。高校の時も、3年の夏に甲子園へ出てホームランを打つという

のを頭の中で描いていました。だから、あの場へ立った時はホームランしか狙わなかったですから。

——それを実際にやってしまうという。

田村 その経験によって、僕はいい未来を想像しておけばそこにたどり着くんだって信じられるようになったんです。

——そのいい未来は、GLEATに関してはどんなものを描いていますか。

田村 僕の中に浮かぶのはどの会場もパンパンに埋まって、もっともっと歓声や声援が飛ぶ空間ですね。今もただけるのはありがたいですけど、その量が増えるほど僕のパフォーマンスも上がりますから。あとは、自分がチャンピオンベルトを巻くことでお客さんの数が増えて会社が潤って、GLEATを広めていく。それを頭の中で想像しています。ベルトを持つ意味っていうんですかね、それは自分の強さを証明するのと同時に、持った人間が背負うべき役割も付随してくるものじゃないですか。今よりもお客さんを増やして、歓声を増やすという望むべきことを、ほかの誰かじゃなく自分の手で形にしたいんです。それがGLEATにとってのよい未来にもなると思うし。

——広めるという意味では、現在保持しているアップタウンのベルトのように他団体で実績を上げることにつながってきます。

田村 僕は常に、どのリングに上がっても闘える、通用する肉体は作りあげておきたいというのがあって、それこそGLEATのチャンピオンだけどほかの団体のヘビー級とはやり合えないじゃダメだと思うんです。チャンピオンはどこにいてもチャンピオンであるべき。アップタウンのベルトに関しても、そういう姿勢で持っているつもりです。



——そのアップタウン王座の防衛戦で、ベアハッグでギブアップ勝ちしたじゃないですか(4・5新宿、佐々木幹矢を相手に2度目の防衛)。ああいうクラシカルな技を必殺技として蘇らせられるのも、ハヤト選手ならではのと思います。

田村 僕、昔の技が好きなんです。それこそシンプルでわかりやすいじゃないですか。今は派手な技や複雑な技が多くて、昔ながらの技はあまり使われないので逆をいってやろうかと。そういう技で決めるのって「ああ、これだったら決まるわ」と思わせる説得力が必要です。僕にはそれを出せる肉体があるので、失われた必殺技のようなものはこれからも使っていきたい。一つひとつの技を丁寧に、大切に使っていきたいんです。捨て身の技は使わない。バチバチ激しくやり合う中でも、自分で健康な体をぶっ壊しにはいきたくないんです。

——健康的な体の維持は、現役を続ける中で重要なテーマです。

田村 ヒザがボロボロになるような技は使わないです。もちろん、それでも続けている選手は凄いですけど、いいパフォーマンスをするには健康的な体でいるのがベストです。シンプルでちゃんと伝わる方が達成感も味わえる。だから今後もベアハッグをつなぎ技ではなく、ちゃんと常にギブアップを獲れるまで磨き上げます。そして、オリジナルの技名なんてつけずに「ベアハッグ」の名称で使い続けます。

春の頂上決戦、開幕

敬意と報復

G-CLASS 2026

FIRST ROUND 5.13 新宿FACE

SEMI FINAL 5.20 新宿FACE

FINAL 6.4 新宿FACE

エル・リンダマン

山村武寛

石田凱士

KAZMA SAKAMOTO

T-Hawk

田村ハヤト

河上隆一

プラスナックルJUN

■開幕戦 5.13(WED)新宿FACE ■準決勝 5.20(WED)新宿FACE ■決勝戦 6.4(THU)新宿FACE

■SRS席 ¥10,000 ■カウンター席 ¥10,000 ■リングサイド席 ¥6,500 ■指定席A ¥5,500 ■指定席B ¥4,500
※小学生以上有料 小学生未満は席が必要な場合は有料 ※当日¥500アップ
※入場時に別途ワンドリンク代¥600が必要になります。※SRS=スペシャルリングサイドは各方角1列目

お問合せ リデットエンターテインメント株式会社
エンターテインメント事業部 03-5219-7717 <https://ent.lidet.co.jp/gleat/>

O-テレ e+ イープラス ぴあ GLEAT プロレス 検索